（アル、持ツ）なる動詞の名詞となりたるものなれば、此の兩語を「家及び家財」と譯するは當れり、漢文の「家」なる語がたゞ「住家」のみの意に非ずして、家に屬するものを一切含みたる意を表はす場合に、此の二語を併せ用ゐて譯したるが如し、只だ住家のみを表はす時には、第六十二行に於るが如く卽ち「家」の一語を以てせり、余は譯語の都合によりて只だ「家」と譯せしも、其の間如上の意味を有するものなるを知るべし。

(7) xaqadaš. 此の語ラドロフ氏の Ṭišastvustik の中にも見え、氏は語頭の xa なる語は實は其の前に立てる語の第三格を示せる語尾にして、寫手が語の構成を知らずして、誤りて之を次の語の頭に付するに至りたるものと見、qadaš のみを一語と見て「仲間」(Gefährte) の譯を施したり、本書第二百八十三行に就て認むるが如く、 xa を qadaš と離して、獨立せしめたる例もありて、 かゝる場合には氏の說けるが如く xa は其の前の語の三格語尾と認め得べきが如きも、 然もまた第八十二行の例によれば、此の語の前に立てる bolur なる語は、動詞の現在分詞にして、 名詞の第三格語尾なる xa を附し得べきに非れば必らずこれ寫手の誤には非ずして、別にかゝる語が存在せしものなるを知るべく、其の義は兄弟の意に用ゐたるものなるが如し。

(8) otvuts...は otvtsuz なるべく、而して ovutsuz（耻無き）の誤なるべし、「淫欲」の二語を ovutsuz bilig を以て譯したる例はラドロフ氏譯普門品第六十一行にも見ゆ。

(9) kövänč は高慢 (Hochmuth) なる語にして慳貪に對せしめたるものなるべし。

(10) itig yaratïγ は ミューラー氏之を裝飾 (Zierrath) と譯し (Uigurica, S. 29) itiglig yaratïγlïγ は其の形容詞として、「飾れる」の意と解き、ルコック氏亦た之に從ひて、ラドロフ氏が itip yaratïp を tuend und schaffend と解きたるを批難せり (Khuastuanift, J. R. A. S. 1911, p. 305)、 されどかゝる「飾る」の意味は、itmäk yaratmaq 卽ち「爲す」「作る」なる語を原義として生じたるものにして、假へばミューラー氏が yiti ärdinin itiglig を「七寶を以て飾りたると」譯せるものも、漢文には「七寶所成」と見え、又た本書第百四行に「所作所爲須作卽作」の「作爲」に對しても此の兩語を用うるを見れば、能く其の意味を悟るを得べし、されば此處にても尙ほ爲作・造作の意にして、漢文の「有爲」に對せしめたるものに外ならず、第七十五行、第三百九十二行に見ゆるのも亦た同じ。

(11) bulnng は bulung（隅・力・邊＝Ecke）の誤寫なるべし。

(12) täkirmän は「磑」に對するものにして、五體淸文鑑に「碾磨」の「碾」に對して tokorman と記せるものも亦た之に同じかるべし。Čag. 語にて尙ほ Mühle の意に用ゐらる。

(13) 此の語は今詳らかに知らざれど、 kištä なる語をトルコ語中の Tümentataren 及び Kasan 方言にて「横木」(Querbalken)「梁」(eine horizontale Stange) と云ふ